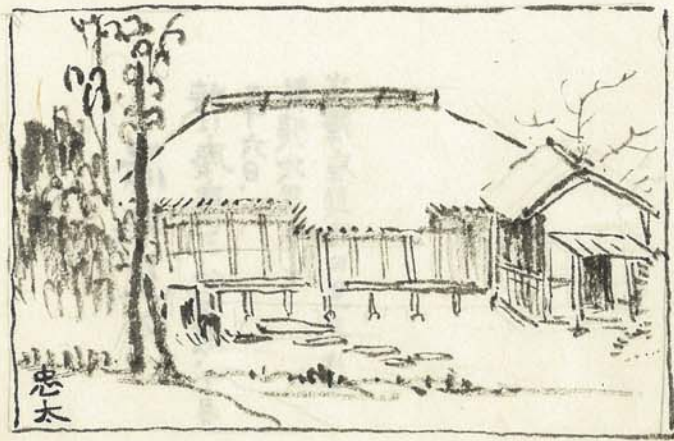
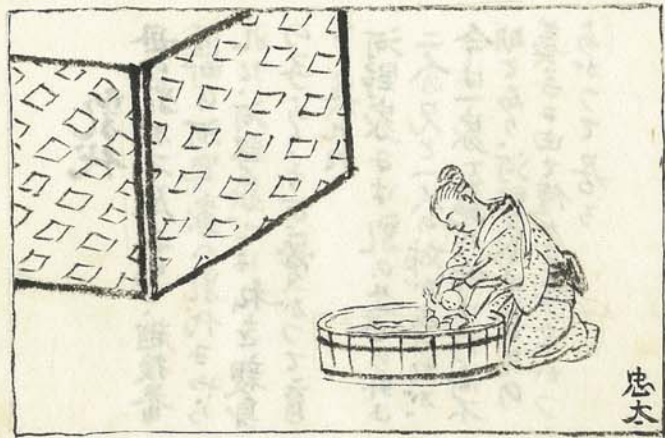


忠太自畫傳

上



忠太



忠太生る

時は慶應三卯の歳、十月
二十六日、
祐順次男として
米澤座頭町に生まれる

乳代

母の乳が不足なので、越後番
匠所の河野家へ乳代子やら
れた。河野家では私を親身
の子よりも可愛がつて音
て、呉れた。

河野家子は乳の父母の外は
二人の兄と一人の姉があつたが、
今は一家死絶へ、姉は行衛不
明となり、河野家は長足の
養子子由で僅かに家名がつ
あがつて居る。





歸家

私が四才よりあつたとき河野家
から生家は引き取られた
河野の母は愛宕の思ひ入
境へず、夜おく坐頭町の家の
裏口より忍び来り若しや忠太
が己れを慕ふて泣いてはせ
ぬがとて内の様子をた規つた

學館通ひ

六才の時、學館に通ひ始めた。頭はとんぼ髷、腰は木刀、短い袴、日和下駄で、風呂敷を背負つたり抱へたりして通學した。手石どきは三字經、その次が孝經であつたが、勿論何のちとやら分らずみ、たゞへらくと素讀した、丈での全部残らず暗誦したのである。

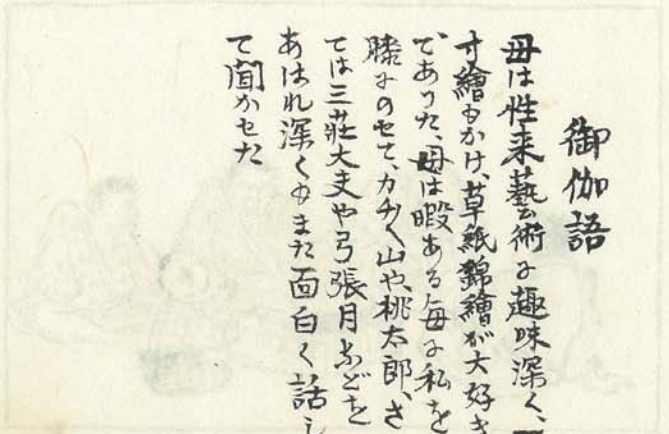


人肉の御馳走

家子は常子七八名の門弟が居たが、いづれカ血気盛ふいたづら者ぞよく犬や狐や猫あどを捕へて煮て喰つて居た。その都度私は呼ばれて御馳走をあつた。或る時彼等は松原で死刑を處せられた罪人の手を斬り取て持て帰り、一度解剖した揚句その肉を試食した。あの時私はその一片を御馳走をあつたのである。



御伽語
 母は性来藝の術子趣味深く、一寸繪もかけ、草紙錦繪が大好きであり、母は暇ある毎に私を膝子のせて、カク山や桃太郎、さへは三壯大支や弓張月あどを、あはれ深くゆまた面白く話して聞かされた





幻視

私の體質は寧ろ弱かつた、動
 ぢやすれば病氣を罹りまして西親
 子心配をかけた。私には一時幻視
 さへ有つたらしい。或る夜母よつき
 添はれて便所へ行くとき、不可思
 議な鳥かの蛇あどが見えた、丈此
 が其堂所の味噌桶の後へ這入り込
 む。私は母を、あれを捕へて下さいと
 せがんで母を驚かし困らせた。

出京

明治六年私と兄とは祖母と祖母の弟山下治右五門子伴は此て出京した道中は私兄弟は或は人足の背に負はれ或は駄馬に乗せられた。駄馬はその真中祖母が乗り、私等兄弟は炬燵槽の中に入れらるゝ馬の左右に附けられた。
かゝる米沢から七日目古河に着き夫れから乗合船で行徳まで下り、十日目東京四谷仲町二丁目十三番の自宅に着いた。東京は父が陸軍軍醫試補として此處に居を構へて居たのであつた。



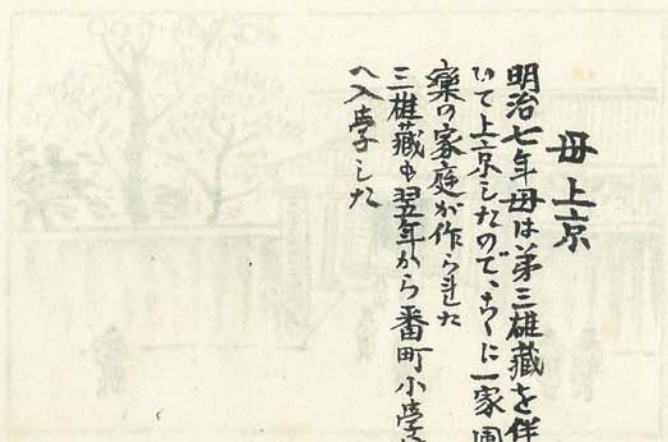


就學
 出京後直ちに全番町小學校に
 入校し、下等八級に編入せられ、
 いろはから習ひ始めた。

昭和十六年十一月
 帝都最古の歴史に輝く
 けふ全番町小學校七十周年記念式
 帝都最古の歴史に輝く、昭和十六年十一月
 十日に「全番町二校」と改稱、
 五十名に達する児童の多さである
 現存の校舎は、明治三十二年
 建築されたもので、校舎の
 構造は、木造二階建てである。
 その外観は、一階部分が
 丁造り、二階部分が、小籠元
 風情を醸し出す。校舎の土は、全番
 町に於いて、最も多量に採掘して
 いる。

母上京

明治七年母は弟三雄藏を伴
いて上京したので、早くに一家團
樂の家庭が作られた
三雄藏は翌年から番町小学校
へ入学した



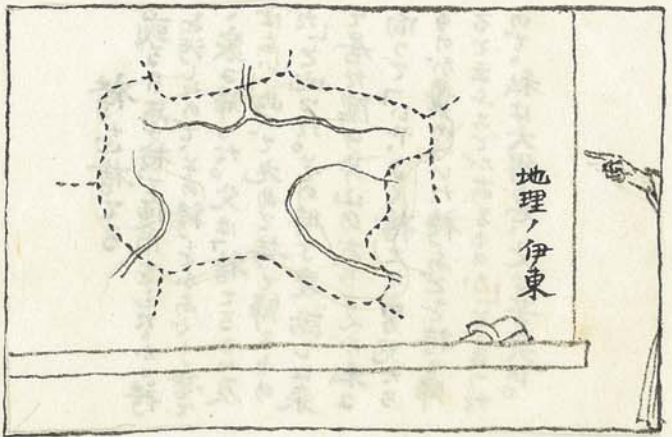
懲罰

小學校では私はよく勉強中したが
また随分面白くあつた或る日何
かいたつちを仕たので放課後一
時間立たせられた。夫は片手子水
を二ばい子入れた茶碗をさげ、片
手子火を点じた線香を持たせ
られるのであつた。茶碗の水は一
滴でもこぼすと叱られる。線香
は罰の軽重によつて一本二本三
本と等差があつた。



地理の伊東

教科書は、文字の教へ日本国尺、
世界国尺をあとであつたが、何れも
ペラ／＼とよく暗誦した。就中私は
地理が大好きであつた。或日先生か
ら丹波の国の図を書けと命ぜら
れ、黒板の物のみごとよ丹波の地
図を書いたので、先生が感心し
て黒板の「地理の伊東」と大書し
て私を賞表した。



地理ノ伊東



袴を捨てる
或る日は手枝で大便をした、かま袴
を汚したので、その袴をかぶり捨て
、家を帰つた。父は「捨てるまゝ及
ばあい、ぬいて丸めて持て帰る中
だ」と叱つた。その時丁度話しに来
て居た隣の片山のおぢさんが私
に向つて「いや、よく捨てた、男児たる
中のが糞のついた袴などを持て帰
ると云ふ事がある中のか」と言つた
ので、私は大得意、父は苦笑ひ。

藪先生と狸

此頃の東京は頗る荒涼たるもので、濠
の土手は荊棘人を没し、狐狸の巢窟
であつた。喰違見付内などは薄暮
の頃から人跡全く絶へ、追ひ剥ぎ人殺
しなど時々あつた。
番町小學校の敷地は旧大名屋敷の
跡で樹林草叢が校舎を囲んで居
たが、或る日庭先きに一足の狸が現
はれた。學校長藪先生、丈れと見
るより疾風の如く走りかゝつて鞭を
くらはしたが、狸は終り樹林の裡に逸し
去つた。





土蔵の中

或る日私は何か大茶目^{しご}を仕出^で来たの
 で懲罪^{いんざい}として土蔵の中に入れられた。私
 は地團太^{ぢだんた}を踏んで泣いたが、不四棚^{ふしだ}の
 上^{うへ}に繪草紙のあるのを見つり、取り出
 して見ると面白いので、ケロリと機嫌^{きげん}が
 直り、夢中^{むちゆう}にあつて讀み耽^たつた。
 母は親心^{おやごころ}で、定めて私が悲しがつて
 泣いて居るだろうと思ひ、刃心^{やぶこころ}で足^{あし}ま
 藏の中を覗いて見ると、安茶^{やすちや}が相違^{あひだ}の
 為^{ため}に、ひた呆^{おぼ}れ呆^{おぼ}れた。母は後々^{おちおち}
 でも、あの事をよく人^{ひと}は中私^{ちゆうし}は中話^わし
 て居られた。



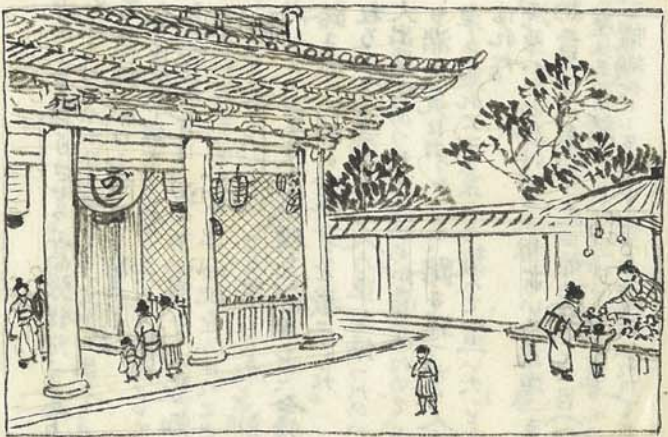
ケンカシヨイ

此頃町の不良幼年共が数名乃至
数十名一團を作り、棒切れを提げ小
旗を押し立て、同音子

ケンカシヨイ、相手は中橋神田橋、
相手があるあら裁判所

と囃し立て、練り歩き、喧嘩の押し
賣りをしたものである。

私は或る日学校の帰途、四ツ谷見
付内での一團子包囲された。彼等が
私に喧嘩を吹っかけ、喧嘩が出来ない
あらあやまれと威嚇した。私はこわく
て堪らなかつたので、素直にあやまれば
彼等は私に罵詈雑言と嘲笑を浴せて立
ち去り、私は辛くも虎口を免れた。



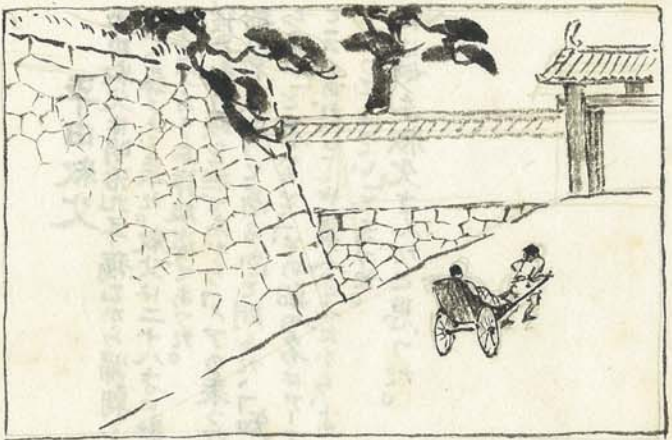
迷児

祖父が上京中病気が罹つて發熱したので、兄と私とは氷を買ふべく銀座へ使ひまわられた。二人は四谷から外濠を傳つて新橋を出て、銀座で首尾よく氷を求め得た。

帰へり、兄は中どの路に戻らうと云ふ。私を支は大迂回であるから近路を求めて帰らうと主張し、終り兄弟別れ、に行動を取らぬ。私は銀座から方角を考へて丸の内に入つたが、ドリ勘違ひしたか北へ北へ行き、常盤橋を渡つて馬喰町を通り浅草橋を出た。それより前已に道を間違へたかと思ひ附いたが、人に道を尋ねるものが嫌いであつたので、行き詰る處まで行つて見ようと思ひ、終り行き行きて浅草観音堂の前で全く行き詰つた。今は何とも仕方がない。その上日暮れか、つねの終り雷門から人力車を乗て家路を引返した。夜に入て家へ歸つて見ると大騒ぎである。忠太が迷児であつたとて、一方警察署へ捜索を依頼する、一方親戚知人を頼んで心

當りを尋ひさせる。高張提灯をあり
かざした人々がひしめき合せて家を出入りす
る為体、私は少からず驚いた。
人々は私が無事を帰つたので歡呼して
喜んだが、父は「汝の不心得から一家知
人のいならず、お上りまで心配をかけたこと
は何と申訳があい」とて嚴しく私を訓
戒して東京の地理を説明して、今後
路を迷つた時の心得方を教示した。
左の如くも浅草から人力車を備つたのハ
大出来であつたと誰やらが賞めたので父
も満足気に「イヤ、ナニ、路を迷つたら人力
車を乗れと平素から教へて置いた」と言
はれた。

浅草から四谷仲町（通称あいの馬場）まで
約二里半の處、車夫は始め一朱と二百（八錢
二厘五毛）を請求したが、途中で日が暮れたの
で蠟燭代として更に二百を追求したのである。



同窓生

当時私等の同窓生の中で、よく私の記憶して居る人は、上級では郷誠之助、廣津直人及武人、同級では野口一太郎、林栄十郎、田中寿次、木村駿吉、森田俊虎、多納栄二郎諸氏であつた。就中野口とは最も仲よしであつた。郷は乱暴おのり有名であり、ズータイの大きいのは庭田重直と云ふが、あかあり、華族まゝの壬生修齊と云ふが居た。當時は男女同室であつたが、生徒中で記憶に存するのほ、加藤弘之先生の女高子(山縣伊三郎夫人)、高木熊千代(故神田乃武夫人)、中田寛子、前橋瀧子、廿寺である。同郷の生徒には入澤敏雄、下條稔郎、同虎次郎、山田鉄藏■が居た。

(浜名哲吉等)



郷誠之助乱暴



加藤弘之先生
 當時番町小學校の校長は丹野啓
 行氏、教頭が下啓介氏、その他多教
 の先生があつたが大方は忘れられた。
 或る日加藤弘之先生が視察に来
 られ生徒一同を大講堂に集めて一場
 の訓話を試みられた、お話を終ると
 加藤先生は、お人ふよく私の話を聞
 いて呉れた、御褒美に銘々お礼を
 進上すると、半紙一帖づつを生徒
 子配与された。私は、加藤先生は顔
 は立派であいが、実子好い先生だと思
 った。

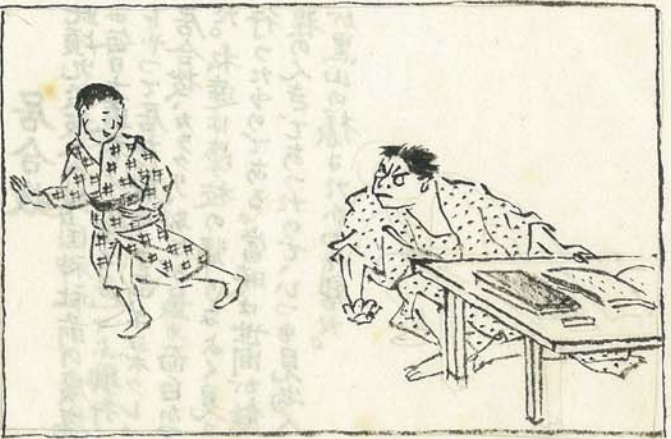


居合拔

此頃九段坂上の靖国神社前の廣場
 に毎日大道藝人が出て色々興行
 をやって居た。就中手品、チヨホクレ、
 居合拔、カラクリ、あとが最も面白かつ
 た。私達は學校の帰りによく見ま
 行つたものである。當時は世間が餘
 程の人ぎであつたので、いつも見物人
 が黒山の様よたかつて居た。

鈍い奴

郷里から佐藤尚順といふ門生が出
京して、しばらく家子書生をして居た。
或時父が客子向つて、「尚順は鈍い奴
で……」と話して居たのを私が聞きか
ぢつて或る日書生部屋へ行つて佐
藤尚順は鈍い奴とからかつたものであ
る。尚順は大に怒つて無礼千萬と責
めた、私はケロリとして「走れでも父さんがそ
う云つたよ」と云ひ捨て、逃げ出した。
おさまらぬのハ佐藤で、直ち子父に抗
議を申し込んだ。私はあとで父から散
々叱られた。



霍乱

明治十年、家は土手三番町三十六番地子轉居した。小次沢長政氏の隣家である。父は間中あく西南戦争に從軍したその留守の間、私は一丈外で何か不良の食物を食つた為、家へ歸ると間中あく急激な吐瀉を越して昏倒した。直ち子書生後藤俊庵を草薙氏の許子走らして未診を求めた、草薙(義哉)氏は一診して霍乱であると言つたが、今の疑似コレラである。九死一一生を得た私は約二週間許り病葺の人とあつた。

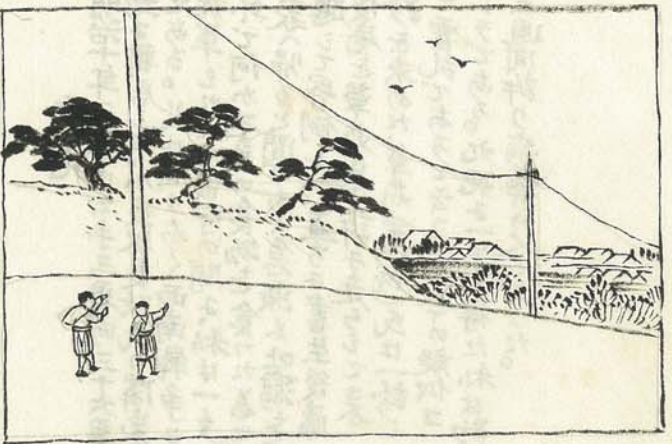


電信

此の頃外濠を沿つて只一本の電信線が敷設された、学校で先生から電信の説明を聞いたが素より分る筈はない。物珍らしく電線を仰ぎ眺めながら、

甲
あの針金を手紙を結びつけて置く
手紙が獨りで針金を傳つて行くのだ
針金がゴーツと鳴つて居る、今電気が
かゝつて居るんだぜ

あど、話し合つた中のである。



北
莓
莓

家の西隣は日就社(讀賣新聞社)の子安
峻と云ふ人の家で半西洋館の立派な家で
あつた同家は基督教信者であつたので時
々オルガンの音や讚美歌の音が聞こへた同
家の子供が声高くビーエーバービーイー!
ビーあどく英語を狂言古して居る声の中
聞こへた。
或る時子安家から一盆の西洋醬を贈
つて来た、これは宅の菜園で作つたのでま
少し許りですが市目まかけまあり、砂糖をか
けて召し上れと使ひの者の口上であつた。
家では始めて西洋醬を見たので一同た、
驚く斗り母は、「形の色申何となく薄薄
気味が悪い、若し中りでもしたら悪
いこて可憎の珍珠を捨て、仕舞つた。



栗泥棒

家の裏隣に廣い屋敷があつて、その
中栗の林が茂つて居た。或る年の秋
栗の實がよく熟したのを垣根越しに
見て多心子欲しくあり、折柄遊びに来た
友達と垣を越えて隣屋敷に入り、心
ゆく許り栗を打ち落した。
その時主人と覺しき老人が突然現は
れ、「コラ、栗泥棒」と怒鳴つた。私共は
驚いて逃げあうとしたが終つつかまつ
た。老人は私共を散々叱り飛ばした
が結局將來を戒めてゆるして呉
れた。





平田叔父

平田叔父は明治九年獨乙から帰朝し
家へ尋ねて来た。叔父は二十八才の壯
年でイケカラな洋服姿であった。
彼は私の頭を撫でながら「アの乗った
船の名を知つて居るか」と問ふた、「知
らぬ」と答へると、「その船の名はアーク
と云ふのだ、もしや異人さんだから、よ
う知つてゐるとい」と云つた。
私は「妙な叔父さんだ」と思つた。

佐倉

明治十二年父は下総佐倉の聯隊附に
轉任を命ぜられたので一家東京を引
き拂つて任地に移住した
家は海隣寺坂上並木町の借家であつたが風景
甚の小さい粗末な平家であつたが風景
は實に美しかった裏庭には断崖の上
に椎の老樹が蟠まり、印旛沼を一望の
中に瞰下し、運かま筑波山を對岸に
眺むるのである。

家主は池田と云ふ人で、別子職業も
なく只だ遊び暮して居た。家賃は二
円五拾錢であつた。



いふこ

家ではみんないふこが大好物で、時折
米澤から取り寄せて食って居た。私
の弁当の菜も時々いふこが入れら
れた。或日例よあつて、学校で弁
当を使って居ると隣席の生徒が
私の弁当をのぞき込んでビツクリし
伊東君がバツタを食って居ると
囃し立てた。すると一人の生徒は大
聲で

「先生、伊東さんがバツタをたべて

居ます」

と云いつけたので、満場の生徒はドッ
と笑つた。私も一しよほ笑つたが随分
きまりが悪かつた。

これは番町小学校時代のふこである
が佐倉でも相かいらしいふこでは止められ
あかつた。



喧嘩

或る時續塾の同門生大宮のヨツ
ヤンと口論を始め、帰途一しよに
麻賀多神社の境内みまこしかゝると
ヨツヤンは私を喧嘩を吹きかけた。
彼は私よりは二ツ三ツ年上で喧嘩
をすれば到底勝算がないのであ
るが、騎虎の勢逃げる譯もも行
かず、尋常子立ち合て喧嘩を始
めた。始めはあぐり合ひ、後よりつかみ
合ひとあつて、私は腕くも彼を組み
敷かれ、呼聲の根の止まる程あぐ
りつけられた。





竊棹

私はまた友達とよく喧嘩をした。或時家主の親戚に当たる板倉の文ちゃんを始めた。文ちゃんは棒を以て打てかゝる。私は急いで裏から蟬捕り用の竊棹を取り出し、文ちゃんの棒の下をクバリつ、彼の頭の毛を棹の先きを突き込んで振ったので、彼は悲鳴を挙げて一と溜り申あく降服した。



彫塑

私は又彫塑もやった。近所から粘土を取って来て、支那人形の動物の盛みこしうへだが、着物でも何でも粘土でよぶので、丸れは母が毎々閉口して居た。
大福餅や饅頭などを貫めと、よくその皮を丸めて何かの形を捲うては笑はれた。



繪画

私は元来繪が大好きで、よく繪本
 を寫したり、自分で描いたりした。「忠
 太は紙さへ当てがうて置けば大人しく
 てよい」と両親も始終言つて居た。私は
 自分で考案して双六を畫いたり、草
 紙をこーらいたりしたが、季節はあち
 と所をこーらいて、画や字をかいた。
 夫が評判があつて、時々友達も頼
 まれて可ありふ大作を試した。



山遊び

家から印播沼の間は山崎岩名飯
野あとの村々があるが、そこは小丘が
起伏して居る間には松林が茂つて居た。
私は時折友達と山遊びを試みたが、
秋になると色々な茸が出るので、ま
を採收するのが何よりの樂であつ
た。殊に初茸が沢山取れたので、家
へ持て歸つてよく煮て食つたので
ある。

私は番町小學校時代にはかうだが弱
く、始終青鼻を垂らして居たが、佐
倉へ来てから、川遊び山遊び暮
した為、ムキリと丈夫な者であつた。



川遊び

私は、学校の方が樂であつたので、ひま
 さへあれば川遊び山遊びも没頭して居
 た。家の下は田んぼで、そこには縦横に
 小川が流れて居り、小丘の裾には清水が
 湧いて、そこには清水鱒が沢山居る。
 私は、小い網を以て小川や清水の雑魚
 を捕へるのを無上の樂みとして居た。
 或時はまた竹の先きで教本の針を
 植へ、それで鱒を突いたり、蛙を刺し
 たりして喜んで居た。

續先生

当時佐倉子續敬徳と云ふ漢学者
があつて、塾生を開いて居た。私は小學校
へ通ふと同時に、また續塾子入門して
漢學を習つた。塾生中で私が一番
年少者であつたので、同門生から忠チ
ヤンと呼ばれ、先生からは忠公と呼ば
れて可愛がられた。

同じ位の年輩者は新田義彦、青葉
栄之進など云ふのがあり、年長者はハ
小川福太郎、石渡素吉、平野高、田中
春水、宇佐見重三郎、星野操、等數十
名あつたが、多くは近在の百姓や土地の
町人で、餘り立派な素生の人は居なかつた
様である。



鹿山小學校

私は東京で小學校の課程を終了して居あつたので、佐倉の鹿山小學校に入り、十級を編入された。あの小學校は初級から十二級までを編制されて居たが東京よりは程度が低いので、私は碌々勉強もしあつた。当時の生徒は才十二級を秀才と呼ばれた井上眞雄と云ふが、入次を才十級生が私一人であつたので人の注目を引いた。

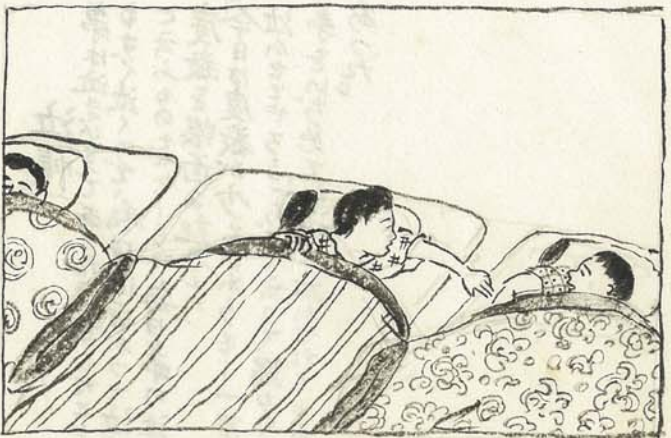
校長は島田先生とて至て嚴格な人であつた。生徒は殆どまて町で兒か百姓で品性も卑しい上言葉が如何にも鄙びて居るのは驚いた。



語り

弟の三雄藏も私の方から小説童話などが大好きで毎夜就寝の後私子何か話しをして呉れとせがむ、私は出鱈目な作り話をして聞かせると弟は喜んで聴いた。之を語りと言つたのである。

「語りは甚唐口無稽極まる中のであつたがその中で、後々まを中一話として笑ひ興じたのは「身体象虎」と「カボロの話」であつた。「身体象虎」は半象半虎の怪物で総ての動物中最も強いものでおれが大活躍をする話である。之が次で強いのが「カハボロ」で「タララ」と鳴く若も人が「タララ」といふ鳴声を三度聞かせられると必ず喰ひ殺されることな話であつた。



後藤俊庵

後藤俊庵は楯岡の生れで、家の書生である。彼は父の師事し、医士の開業免状を得る為毎日必死の勉強をして居た。處が彼が声高く理化學書を読んで居た。その音調が可笑しいとて私共兄弟は、その口調を真似して彼を困らせたのはまだしも、時々書生部屋へ押し付けて彼が熱心に讀書して居る後から眼をかす、肩子とりつく、本を奪ふ、あらゆる妨害を試みて、彼を怒らせて喜んだのである。併し善良ある後藤は私等兄弟を可愛がつてよく世話をして呉れたので、父母も深く彼を信用して居た。



美術は末技

或時父は私に、将来汝は何の専門を
選ぶかと問ふた。私は美術家になり
度いと答へると、父は容を正して私に
斯ふ言つた。

苟や男児たる由のが国家の為に
竭す事を考へずは、美術家にな
らうとは臍甲斐あいた筈である。
美術家とは士人のあべき由のでは
ない、夫は所謂末技と云ふのだ。
私は父の意見が臍に落ちあかつた、
併し抗辯する程の知識もないので、
その場は不得要領を終つた。



變則英語

私は續塾へ通つた傍ら鹿山中學へ
も通つて英語を習ひ始めた(小學は
卒業したのである)その英語あるもの
逆も不思議千万あるのであつたが發
音の變態を處は例之ば左の如きもの
であつた

Grammar is difficult but ordinary
Study

グラマール イス デップイコルト ポット オルヂナリー
ストデー

Mother = モザル Other = オザル

us = オク thousand = ゴーザン

fire = ファイル her = ホル

佐倉子は当時別子佐波先生の英語
塾があつたがこの方は幾分正則に近
いものであつた。

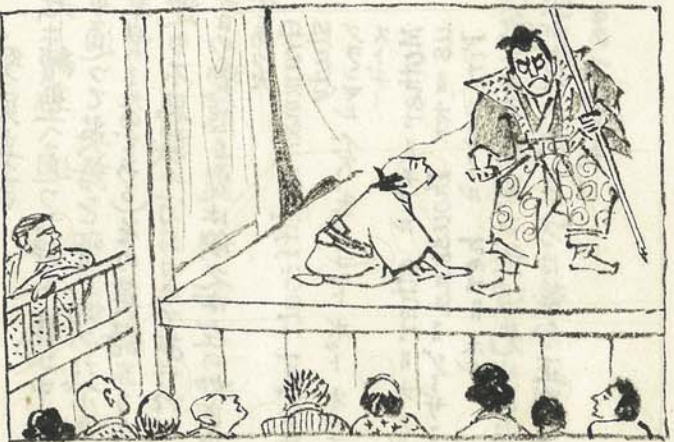


芝居と撃手剣

或る時東京から旅役者の一行が来て興行したが、座頭は中村福藏と云つて、可成りの腕を見せた。非常な評判であつたので、私由一丈見子行つた、あれが私の最初の観劇であつた。外題は隅田川の梅若殺しや、四谷怪談やいろいろあつたが、その中は何やらいふ外題の中幕で、

「水野十郎左内ぢが来てあやまらうば、鎗は返へして呉れん……」

と云ふせりふのあつたのを聞き覚えへまれからぢかど云ふふことを「水野」と云ふことゝした。又或る時近郊下根村子撃手剣會があつた。私は兄弟連れて見物へ行つた。その時根本某と云ふ男が竹刀をあやつる姿勢がいかに滑管でトボケて居たので、まじから「根もと」と云ふことを「トボケ」と云ふことゝした。



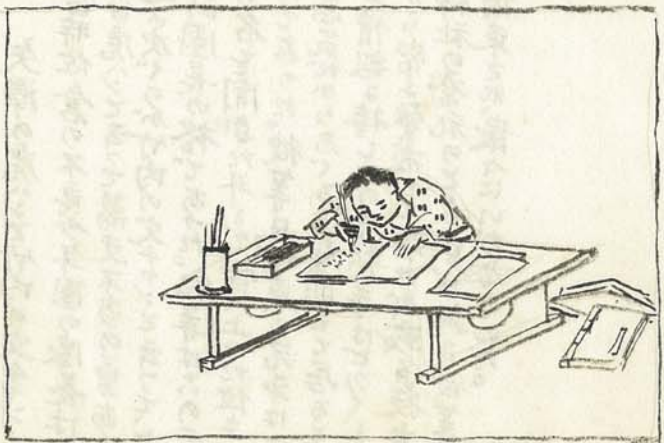
矢澤の虎ハシと竹内の文キヤン

當時佐倉の不良少年團の隊長は矢澤の虎ハシと云つて萬丈不当の勇あり、之み次ぐのか竹内の文キヤンと云つて、之ハ副團長の格であつた。私等はあの二人の名を聞いた斗りて慄へ上つた位であつた。彼等は伊東の兄弟は生意気だからあぐる」と聲明して居ると云ふ情報を受けしたので、私等はビクくしからず常々警戒して居たが、或る夜某神社の祭礼のとき、兄は終つ彼等寺を拘束され、散々にいぢめられた。



名文

私は續藝で十八史畧や文章軌軌を
讀み習つて居る内、いつしか文章は
趣味を覺へ漢詩の作り方も習つて、
詩韻會英詩語萃金おどく首つ引
で若干の悪詩も作つた。
或る時狐狸の説と云ふ題で一文を作
つたが、父が非常子よく出来たと先
生子激賞された。賞あるとこの嫌ひな
父も少しは賞はちぎつた。
私は又議論が大好きでよく友達と言
ひ合つたが、性来負け嫌ひで、大抵の場
合は剛情を張り徹した。



猛風

同じ年佐倉は空前の猛風が起つた
夫は物凄しい筑波嵐で断崖の上より立
つ私等の家へまともな吹きつけるので
さあきだろ弱い建物はミシクとゆれる。
見りく樹木は倒される。屋根はむり
取られる。空を飛ぶ沙石木竹は鋭く
うありを発する。一家中色を失て驚
き戦いたが父は「北の雨戸を用心しろ、若
も雨戸を破られたら家中の物は残らさず
吹き飛ばされる」と叫びつゝ一家中物動員
を行つて必死と雨戸を防いたが、風力は
益々加はる斗り、父も万一を慮つて貴重
品を取りまよめ、陥落の覚悟をしたが、
幸あして次第に風力衰へ家は潰倒
を免れた。





大雷

明治十三年の夏、私は佐倉で最激烈
猛猛ある大雷を経験した。殆んど間
断なく閃光と電光、天地を震動する
霹靂、恐ろしきと言ふも過心である。
二所斗り距つた宮所の老杉へ落ちたとき
などは家の戸障子も破れる斗りもゆり
動かされた。一家中ちびみ上つて、一ヶ所
かたまった。父は「若も家も落ちたら一家
内皆死ぬとワルイ、銘々散りくま離れて居
此と命令した。その内次子も静かにあつた
ので私等一同蘇生の思ひをしたが、私等
はその時から雷を少しも怖れなくなつた。
六の日の雷は約二時間以上ツゞき、狭い
佐倉の町内は二十三ヶ所の落雷があ
つた。古老もおんな大雷は始めてだと言
つて居た。



人魂

或る夜續々から家へ歸る途中
東北の方より低く一塊の怪光が長く尾
を引て飛ぶのを見た町の人は口
々々人魂人魂と叫びてとよめいた。
家へ歸つて見ると家でもその話
で賑はうて居るが父は流星だろう
と解した。結局その真相は終り分
らなかつたが決して普通の流星
では無いと思つた。蓋しこれが私の
見た最初のゴースト又恐らくは最
後の怪光であろう。

危く溺死

佐倉の南郊六寄と云ふ所子小川がある。或る夏の日、續熟の連中と緒子水泳子行つたが、私は勿論少しも泳ぎの心得があいので、浅い所でチャブチャブやつて行た。スルと伊藤の龍チャンと云ふ泳ぎの達人が、深い處で立ち泳ぎをしあがり、「忠チャン、お前は浅いから来て見ろ」と誘つた。私は何心なくその方へ歩いて行くと、勿心ち深みへはまり込んだ、そこは私の背丈けよりも深かつたので、私はブクブクと沈んでした。お水飲み、あや溺死せんとした。龍チャン始めをば子居た友達か直ち子救つて呉れたので無事であつたが、一時は殆んど人事不省であつた。





泣帳

弟は泣きびすであつた、一寸したことも
 やまなく泣くので、私は面白がつて泣帳
 と云ふものをとらへ、毎日弟の泣く
 度数を帳面に記入した。
 今日ば度数が少いから、モー一度
 泣かせてやろうし、あどく云つて、罪もない
 弟をいぢめて無理に泣かせたこと中
 あつた。

近郊

佐倉ニケ年間生活は實ニ愉快であつた。その間ニ近郊へしばしば遠足を試みた。西の方は角來、江原、白井辺、東から東北の方は將門、大蛇、酒井、公津、成田辺、但し南の方へは餘り行かぬ。その内では最印象の深く残つて居るのは成田遠足であるが、西郊鹿州橋上から印燻沼を展望した風景が忘れ難いのであつた。

